

# 奴隷の酒から、独立運動で民衆の心をつかみ、カクテルでセレブの酒に

## ブラジルの国民酒「カシャッサ」の出世史

「おっばいとお尻だらけ」のリオの保養地コパカバーナで「カイピリーニャ」を飲む。これは夢であって、筆者にとって現実ではない。ブラジルは行ってみたい国の一つだ。

ブラジルには、サトウキビを原料とし、その搾り汁を発酵させた蒸留酒「カシャッサ」という酒がある（度数38～48度）。キューバのラム酒と同類だ（キューバのラムはサトウキビ由来の糖蜜から作る）。日本では知名度が低いですが、世界ではウオッカ、韓国ソジュに次ぎ3番目に多いスピリッツ（蒸留酒）である。

ブラジルは16世紀、ポルトガルの植民地になり、サトウキビのプランテーションが始まり、それに伴い、アフリカから奴隷が入ってきた。カシャッサは製糖工場で働いていた黒人奴隷によって偶然発見された。サトウキビの搾り汁の泡が自然発酵しアルコールを含んだ液体となり、その液体を奴隷たちが口にしたら気分が良くなった。アルコールは過酷な労働を強いられていた奴隷にとって活力源として無くてはならないものとなった。

18世紀、南東部のミナス・ジェライス州で金が発見され、ゴールドラッシュが起こる。これに伴い、南東部で労働者が増え、カシャッサの生産も当地で増えた。

カシャッサが国民酒に成長したのは、独立運動と関係がある。1789年、独立運動が起き、この時に掲げられた「独立の乾杯はポルトガルワインではなく、我々のカシャッサだ」というスローガンが民衆の心をつかみ、一般大衆に浸透していった。このブラジル初の独立運動は失敗に終わったが、指導者チラデンテスは今でも国民的英雄である（ブラジル独立は1822年）。カシャッサにはこれ以上のものはない「物語」があるわけだ。また、「国民酒」は「民衆の酒」なのである。19世紀に国民酒に発展した。

今日のように国民に人気が出たのは、カシャッサベースのカクテル（材料ライム）「カイピリーニャ」が普及してからである。カイピリーニャは20世紀前半に生まれたが、都市中産階層に飲まれるようになったのは1950年代である。ビーチで飲まれる酒や、

ホテルで供されるようになったのは50年代である。

奴隷の酒（16世紀）から、労働者の酒（18世紀）に出世し、管理者の酒（19世紀）、そして1950年代、上層階層の酒へと社会上昇したのが、カシャッサの出世史である。黒人奴隷に発見され、独立運動で民衆の心をつかみ、カイピリーニャになってセレブたちの酒になった。歴史家トインビーや政治家ロバート・ケネディもカシャッサに魅せられた。2012年には条例で、リオデジャネイロ州の文化遺産に認定された。

カシャッサは生産様式の違いから、「カシャッサ・インダストリアル」（大量生産）と「カシャッサ・アルティザナウ」（クラフトカシャッサ、小規模生産）の2種類がある。アルティザナウは昔ながらの製法、少量生産の手作り製品で、口当たりがまろやかで香りが高い。ストレートで少量を、じっくり味わいながら飲むプレミアムな酒だ。インダストリアルはカクテル「カイピリーニャ」のベースとして使われることが多い。カシャッサの大半はインダスティアルが占める。

価格は、クラフトカシャッサ750ml 60レアル（約1,600円）に対し、大量生産品「51」965ml 7.7レアル（約210円）と、10倍差がある。ただし、インダストリアルの中にも木樽で熟成させたプレミアム・ラインがあり、漸増傾向にある。

「カシャッサ指数」なるものが開発されている。全国消費者期待指数とカシャッサ販売量は“逆相関”があるという。カシャッサは他のアルコール飲料に比べ価格が安く、社会に対する鬱憤を発散するには手頃な飲料のようだ。消費者の期待指数が低下すれば（社会に対する鬱憤上昇）、カシャッサ指数は上昇する（つまり沢山飲まれる）。カシャッサ指数は、国民の感情を表す指標として使われている。まさしく「国民酒」だ。

現在、カシャッサの国民1人当たり消費量は約6ℓ（成人1人当たり10ℓ）。出荷量は微減傾向にあるが、輸出はドイツ向けを中心に漸増している。